

新羽浅間神社遺跡  
(港北区No.247遺跡)

調査期間 20120201～継続中

所在地 横浜市港北区新羽町

時代

縄文  
弥生  
古墳  
近世



作成日:2012626

概要

新羽浅間神社遺跡の発掘調査は、首都高速道路株式会社による高速横浜環状北線の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存として、平成24年2月1日から実施しています。

本遺跡は横浜市営地下鉄北新横浜駅から南西に10分程歩いたところであり、鶴見川の左岸に立地しています。遺跡の標高は最も高いところで約22m、低いところでは約10m、その比高差はおよそ12mです。

調査の結果、縄文時代の集石や弥生時代中期初頭のどきかんぼ土器棺墓、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居址、古墳時代後期の横穴墓、近世以降の土坑等が発見されています。これらの遺構に加え、遺物では縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、陶器、銭貨等が出土しています。縄文土器では、中期のごりょうがだい五領ヶ台式土器や晩期のあんぎょう安行式土器が確認されています。

中でも注目すべき遺構は、弥生時代中期初頭の土器棺墓です。東日本のこの時期の墓は一度埋葬した遺体を洗骨等により骨化させ、その後、土器棺に納める再葬墓と呼ばれるものが一般的です。再葬墓の事例は神奈川県内では非常に珍しく、県西部の山間部にわずかに分布するのみです。本遺跡で発見された土器棺墓も再葬行為を伴う墓である可能性が高く、発掘調査で確認された事例としては貴重なものと言えます。

また、本遺跡内に立地する通称「かめのこやま亀甲山」は、室町時代の武将、太田道灌とゆかりのある場所です。本遺跡から鶴見川をはさんだ対岸には15世紀中頃に築かれたとされる小机城があり、太田道灌が小机城を攻める際に陣を敷いた場所が亀甲山だと言われています。およそ2ヶ月の攻防を繰り返した後、太田道灌は小机城を攻め落とすことに成功したそうです。



▲ 1号竪穴住居址



▲ 1号土器棺墓



▲ 遺跡から小机城を望む